



高山峻野君、世界陸上競技選手権大会出場おめでとう!

中広中学校(現口田中) 顧問(教諭) 田川 司

今年の4月(第51回)の織田記念陸上の際に工大高校の福地先生と、「もしかしら、もしかするかもね」と二人で予感めいた話をした。日本選手権の準決勝で標準記録を突破した事を知り、決勝をテレビで観た時には、嬉しいやら恐ろしいやら複雑な心情だった。

彼が中学校に入学した年は、私が中広中学校に赴任して6年目。赴任してから1番チームが熱い年となった。彼の兄は3年生の先輩としてリレーメンバーとしても活躍し、チームは山縣選手の修道中学とリレーで全国大会の出場権を争っていた。個人競技として全国大会に110mHと四種競技で出場する選手がおり、それ以外に2名の選手が四種競技で中国大会に出場した。この年は県内のハードル選手で上位の選手が3名もいた。

高山君は、入学当初は学校外の野球チームにも所属し、陸上への取り組み方は野球のついでといった感じだった。県中学選手権(第34回)では1年男子100mで3位に入賞し中国大会に出場したが、予選で敗退し決勝には行けなかった。この時に彼は野球を辞め、陸上競技一本に専念することを決めた。その後は、陸上競技に対する姿勢が大きく変わり、上級生の影響もあってハードル競技を始める事にした。1年生から3年連続ジュニアオリンピックに出場したが、残念ながら1、2年とも準決勝敗退。1年生の時には3年生の先輩が7位に入賞する姿を見ていた。3年生の時に大分全中に初めて出場し、決勝で100分3秒差の4位の成績だった。悔しかったと思う。秋のジュニアオリンピックでは全中での雪辱を期して出場し、見事3位になった。

高山君は負けて強くなった選手だ。彼は普段おっとりとした性格だが、時々自分の中でスイッチが入る瞬間がある。彼はジュニアオリンピックで3位に入賞したことに満足せず、3年生の冬には受験勉強をしながら、高校進学後のハイハードルの練習に自ら取り組んでいた事には驚かされた。また、高校でも3年生のインターハイでは転倒し残念な思いをしたが、その冬の練習が高校3年間で一番頑張っていたという事を福地先生から聞いた。

2年前の日本選手権での日本一は、初めて全国大会規模での優勝で、このことで自分の中の糸が切れないかと心配したが、その必要はなかった。彼には順位や記録だけでなく自分の中に他人には分からない、何か強く思うものがあるのではないか。これからも、周りに惑わされず自分の進む先をしっかり見つけ、今回の世界陸上出場にも満足せず、自分の中にある「ハードル競技を極める」まで頑張ってくれる事を願っている。



↑中広中学校 陸上競技部 陸上競技記録集(平成20年度)より

広島工業大学高校 元顧問(現教頭) 福地 光文

高校3年の夏、高校生アスリートなら誰もが目標にする全国高校総体(インターハイ)、この年は新潟で行われた。高山は高校歴代8位(当時)相当の記録を持ち、堂々のランキング1位で臨んでいた。周りも私も優勝は固いと思っていた。ところが、「好事魔多し」予選のレースでバランスを崩し転倒、予選落ちとなってしまったのだ。この衝撃的な出来事は高校3年間の指導のなかで最も強く印象に残るものになった。

その3年後(2015年)、大学3年生になった高山は同じ競技場で開催された日本選手権110mH決勝の場に立っていた。奇しくも転倒した同じレーンに。レースは接戦を制し自身初の全国優勝を達成したのだった。高校時代は実力がありながら無冠に終わらせてしまったという指導者としての自責の念を拭き去ってくれた。

さて、高山との出会いは彼の中学1年生の時まで遡るが、その頃から注目していた選手だった。中学の指導者(田川司先生)によって才能が開花しはじめ、次第に頭角を現すようになった。粗削りで動きが固いが速い、ハードリングは華麗とはいえないが、躍動感がある。魅力十分の選手だった。

高校入学後もその魅力は変わらなかったが、1年次は練習にムラがあり食事同様、好き嫌いが見られた。しかし、2年次に怪我をしたこともあり、その頃から変わっていった。3年次にはシーズン前半から好記録を連発し、バルセロナ(スペイン)で開催された世界ジュニアに出場するまでになった。それでも、全国優勝には至らなかった。

高校時代を端的に表すなら「波乱万丈」だった。何かやってくれそうな期待感に溢れ、「ワクワクドキ」を味わった。予定調和で終わらない「高山劇場」はこれから第二部がはじまろうとしている。どんな物語になるのか楽しみで仕方がない。



↑第65回 中国高校陸上の様子

第71回 広島県陸上競技選手権大会を終えて

大阪で高山選手が世界選手権を決めるなど広島県勢が活躍しているなか、広島でも多くの選手が熱い戦いを繰り広げた。

今大会で男子三段跳と男子円盤投で3大会連続優勝があった。男子三段跳は鶴学園クラブの富山拓矢選手、男子円盤投ではTeamBigStoneの厚見幸選手が3連覇を果たした。

過去には多く連続優勝は見られたが、近年では稀であった。地元広島で競技を続け、この大会へ出場してもらえるよう主催者である広島陸上競技協会はもちろん競技役員一同、次回大会も気を引き締めて大会運営に携わりたい。

競技運営委員会 木本 慎吾



男子三段跳：富山拓矢選手(中央)

男子円盤投：厚見幸選手(中央)

青少年健全育成協力企業

- 株式会社サタケ
- 広島駅弁当株式会社
- 株式会社広島銀行
- 広島ガス株式会社
- 広島電鉄株式会社
- 学校法人石田学園
- 株式会社中電工
- 株式会社もみじ銀行
- 広島総合警備保障株式会社
- 有限会社ニシヒコ
- アシックスジャパン株式会社
- 有限会社道後山高原サービス
- 株式会社体育社
- 中国電力株式会社
- 大塚製薬株式会社
- 株式会社ツルハグループ
- ドラッグ&ファーマシー西日本

(順不同)

青少年の夢を応援します!

NEWS

JAAF HIROSHIMA 陸協ひろしまニュース 一般財団法人 広島陸上競技協会

第85号 H29.7.17発行

高山峻野

Shunya Takayama

世界の大舞台へ、真っ向勝負を挑む。



Congratulatory address

会長 三宅 勝次

日頃より、広島陸上競技協会にご理解とご支援を賜り、心より感謝いたします。この度、高山峻野選手(ゼンリン)が、日本選手権で標準記録を突破し世界選手権大会出場を決めました。広島にとって、大変元気の出るニュースであります。

日本選手権での感動の110mH決勝。力強い走りでした。広島の地で生まれ育ち、兄に続いて中広中から始めた陸上競技。広島工業大学高校で確実に力を伸ばし、進学そして就職へ。今まで両親を始め、多くの方に支えてきまらってきたことに感謝の心を持ち、ロンドンでのびのびとやってほしい。谷川 聡(ミズノ)選手が、2004年にアテネで出した現在の日本記録13秒39。この記録を第一に破るのは、高山君、あなたではないでしょうか。期待しています。

日本陸上で自己新連発! 高山峻野が世界陸上へ!!

「常に自分のレースをしたい。インターバルの体のブレを修正すればタイムは伸びる」と宣言。

第101回日本陸上競技選手権大会 OSAKA 2017

選手名	所属	出身	種目	記録	登録陸協
山縣亮太	SEIKO	修道高	男子100m	6位 10秒39	東京
鎌板哲哉	旭化成	世羅高	男子5000m	6位 13分53秒87	宮崎
高山峻野	ゼンリン	広工大高	男子1000m	7位 2分47秒96	神奈川
真野友博	福岡大	山陽高	男子110mH	1位 13秒45	広島
木村文子	エディオン	福岡北高	男子走高跳	7位 2m15	広島
福部真子	日本体育大学	菅美高	女子100mH	1位 13秒12	広島
小池彩加	エディオン	西条農高	女子3000mSC	4位 10分04秒73	茨城
仲田 愛	水戸信用金庫	日影館高	女子円盤投	2位 4m20	新潟
敷本 愛	新潟アルビレックスRC	砂谷中	女子ハンマー投	3位 49m21	福岡
渡邊 西	丸和運輸	一ツ橋中	女子やり投	2位 62m64	大阪
森 友佳	東大阪市陸協			4位 59m10	



男子	110mH	OFFICIAL	NR13.39
1	181 高山峻野	ゼンリン	JR13.73
2	150 矢野元太	デサントTC	OR13.40
3	122 増野大志	ヤマダ電機	13.45
4	158 佐藤大旺	日立化成	13.606
5	457 金井大	北海道大	13.610
6	332 築城 隆平	国際武道大	13.69
7	380 石川 新也	筑波大	13.77
8	112 田中 友	K-plus	13.791
			13.794
			13.794
			13.92

陸上人

FILE0022

独自のメンタルトレーニングで集中力を高める

高山 峻野 | 110mH | ゼンリン | Shunya Takayama

プロフィール	高山峻野(たかやま・しゅんや) / 身長:182.5cm / 体重:73.5g / 1994年(平成6年)9月3日生まれ 1994年(平成6年)広島市生まれ→2007年(平成19年)広島市立中広中学校・入学→2010年(平成22年)広島工業大学高等学校・入学→2013年(平成25年)明治大学・入学→2017年(平成29年)株式会社ゼンリン・入社
主な成績	2010年 第65回 国民体育大会(千葉国体) 男子110mJH → 第5位 14秒34(+1.5) 2011年 第64回 全国高等学校総合体育大会 男子110mH → 第7位 14秒70(+2.4)w 2012年 第14回 世界ジュニア陸上競技選手権大会 男子110mJH → 出場 14秒06(-0.8) [広島県高校新記録樹立] 2012年 第65回 国民体育大会(岐阜国体) 男子110mH(少年A) → 第3位 14秒22(+1.0) 2012年 第28回 日本ジュニア陸上競技選手権大会 男子110mH → 第6位 14秒46(+0.4) 2015年 第99回 日本選手権 男子110mH → 第1位 13秒81(-1.4) 2016年 第88回 日本学生対校選手権 男子110mH → 第1位 14秒02(-1.9)
自己ベスト	110mH 13秒44(+0.6) 2017年 日本選手権 準決勝

観客もどよめく圧勝劇だった。6月25日にヤンマースタジアム長居で開かれた日本選手権の男子110m障害決勝。勝ったのはリオデジャネイロ五輪代表の矢沢航(デサント)でも前日に大会記録を更新した増野元太(ヤマダ電機)でもない。実業団1年目の22歳、高山峻野(ゼンリン、広島工大高出)は向かい風0.2mの中で13秒45でゴールに飛び込むと、わずかに表情を緩めた。「まさか、という気持ちがあって、うれしさも倍増しました」。同種目で日本人選

手が世界選手権に出場するのは2009年以来、4大会ぶり。広島県出身者では同種目初の代表という快挙を決めた瞬間だった。前日24日の準決勝で13秒44の自己ベストをマークし、世界選手権の参加標準記録(13秒48)を突破。1位で代表が内定する決勝は、最初の8歩で流れをつかんだ。「初めの4歩でリズムをつくり、残りの4歩でハードルに合わせるイメージで練習を積んできた」。軽やかに1台目を越えると、3台目まで

一気にリードを拡大。課題の後半も他の実力者を寄せ付けなかった。「後半も腕を振って、気持ちで行った。1位でゴールできて、気持ち良かったです」と笑い、合同練習も実施している同郷の木村文子(エディオン)の女子100m障害制覇にも触れて「木村さんとアベック優勝できて、すごくうれしい」と喜びをかみしめた。

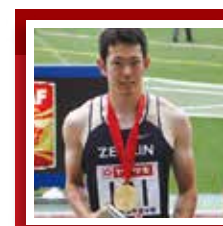
飛躍への伏線はあった。4月29日の織田記念(エディオンスタジアム広島)。実業団選手として初めて臨んだ古里でのレースで、当時のセカンドベストとなる13秒67をマークして3位に入賞。「お世話になった先生方が役員を務める大会で、良い報告ができる」と喜んだ一方で、「スタートの反応が他の選手より0.02秒くらい遅い」と改めて課題も確認。この時は「3年後に遅れを埋めた姿を見せたい」と誓ったが、わずか2カ月で満点の答えを出して見せた。

182cm、72kg。中広中で競技を始めて以来、潜在能力の高さで将来を囑望されてきたが、全国の頂点にはあと一步届かなかった。3年時の全国中学校体育大会では4位に入賞し、広島工大高1年で出場した千葉国体の少年Bは5位。3年時は6月に中国



高校新記録となる14秒10をマークし、7月の世界ジュニア選手権の代表入り。しかし、優勝候補として臨んだ新潟インターハイでは予選で転倒して敗退。秋の岐阜国体も3位と悔しさを味わってきた。

大舞台で「日本一」のタイトルを手にしたのは明大3年の2015年日本選手権。舞台は高校3年のインターハイで転倒の苦渋を味わった新潟だった。当時の自己記録は出場22選手中18番目というダークホースが頂点に立ち、「実



高山選手からのコメント

今シーズンは今回の日本選手権に照準を合わせていました。調整うまくいきい状態に大会に臨むことができました。予選からベストが出るなど好調のまま決勝を迎えましたが、まさか優勝できると思いませんでしたし、しかも自分が世界陸上に出場できるなどとは考えてもなかったもので、決まった時は嬉しさよりも動揺が勝っていました。多くの方々に応援をいただいた感謝しています。世界陸上でも「ベスト」を狙って出場しますので、よろしくお祈りします。

感が無い。どうして自分が1番になったのかわからない」と初々しく振り返った。あれから2年。「前回の優勝は流れて、いつのまにか勝っちゃったという感じだったけど、今回はしっかりレースを作って勝つことができた。この2年間で体がしっかり出来上がってきたのも大きい」。心身の成長が、2度目の頂点の土台となった。

今季は成長ぶりに加え、「ネガティブすぎる発言」でも話題となった。5月の東日本実業団選手権で初優勝した際も「世界選手権の参加標準記録を突破する気はない。重圧を感じるより自由に走りたい」とコメント。日本選手権の準決勝で参加標準記録をクリアした後も「今日で燃え尽きてしまった感じがあるので、明日に残っているかが心配」と漏らして報道陣を笑わせた。

ただ、これらのネガティブな発言もメンタルを一定に保つための取り組み

だ。「あえて気持ちを下げることで、メンタルのバランスと取っている。極端にしないように」と説明。大学2年ごろから本格的にメンタルトレーニングを実施し、「大舞台でも緊張はしない。普段通りにレースに臨める」と自信を見せる。

初の世界選手権に向けても、無用な気負いはない。「今の自分では通用しないので走力や筋力を付け直して臨みたい(ハードル間の)インターバルで体がぶれる点を修正していけば、タイムは伸びると思う」。ようやく第一線に躍り出た大器は、地に足をつけて決戦の地・ロンドンへと跳ぶ。 text by K

